

●マシュー・シュルタイス (1997～)

## 『コロンビア、年老いて』 (2020)

この作品にとってインスピレーションの最初の源となったのは、フランシス・ベーコン (1909～92) の描く肖像画、とりわけ1949年の『頭部』シリーズと1950年 [通常は1953年とされる] の『ベラスケス作『教皇インノケンティウスX世』による習作』である。作曲を進めるうちに、かつては裕福であったけれどもいまや消滅の危機に瀕している社会の抽象的なイメージ、また以前は上流社会の花形として贅沢な暮らしをしていたのに、いまは年老いて衰弱し、ほとんど動くことのできなくなってしまった人間というコンセプトも、インスピレーションを与えた。『コロンビア、年老いて』は2020年の後半に作曲されたが [「コロンビア」はアメリカ合衆国の雅称。赤、青、白の服を着た女性として擬人化されることが多い]、その構想にあたっては、新型コロナウイルスの感染が拡大し、人種に関わる不正を考慮する文化が全国規模で広がったアメリカに生きているという体験が、重要な役割を果たした。

※ [ ] は訳者による補足

[マシュー・シュルタイス/平野貴俊 訳]

3 Fl (2 Picc) / 3 Ob (E-Hrn) / 3 Cl (Bs-Cl) / 3 Fg (C-Fg) - 4 Hrn / 3 Trp / 2 T-Trb / Bs-Trb / Tub - 3 Perc (I = Bass Drum / Field Drum / 4 Wood Blocks / Glass Chimes / Glock / Sandpaper Blocks II = 4 Crotales / Kit Bass Drum / Snare Drum / 4 Pot Lids / Sizzle Cym / Bell Tree / Lid of Glock Box III = 4 Rototoms / Kit Bass Drum / Log Drum / 3 Tin Cans / Sizzle Cym / Rutes / Sandpaper Blocks) - Pf - Hrp - Strings (minimum: 14-12-10-10-8)

●マティアス・ピンチャー (1971～)

## 『目覚め [ウン・デスペルタール]』

チェロとオーケストラのための (2016)

マティアス・ピンチャーは、第2のチェロ協奏曲『目覚め [ウン・デスペルタール]』を最初のチェロ協奏曲『ナルキッソス考』とは、まったく違ったやり方で組み立てた。この協奏曲は、抒情的、親密、透明なのである。ピンチャーの説明では、この作品の音質の出発点となるのは、ひとりの男から発せられるような深く温かい歌唱である。「チェロの低音域で奏でられる、息の長く、柔らかで、優しく、内奥

の歌」から、きわめて特徴的なヴィルトゥオジティが生まれ出てくる。「すでにヴァイオリン協奏曲で創作上のテーマとしたのも、旋律的なフレーズをつくってこれを大いに歌うことであり、線の流れを緩やかにすることであり、地平を拡大すること、つまり、音楽を垂直にではなく水平に広げることであったが、今回のチェロ協奏曲にも同じ望みをもった。」この作品の音質の着想源のひとつはアリサ・ワイラースタインであり、「彼女の演奏のなかに含みこまれている信じられないほど抒情的なダーク・ゴールドの色彩」である。同じチェロ協奏曲でも前の『ナルキッソス考』が、この楽器から発せられる音を高さの極みに、つまり「尋常ならざるほどに燃え盛り、急速かつヒステリックな」状態に追い込んでいったのに対して、今回のピンチャーは「まるで影の立てる音から生じてきたかのような」作品を作りだした。「男声に似た」深い音色の歌を聴かせるという、この音楽の基本的な方向性は、必然的にチェロの中音域、また低音域の可能性を探求するが、そのことは、この曲のオーケストラ書法にも決定的な影響を与えている。実にそれは、抒情性、大いなる優しさ、透明さに特徴づけられている。

この作品のタイトルは、オクタビオ・パス(1914~98)の同名の詩『目覚め [ウン・デスペルタール]』から取られたもので、1966年のこの詩の雰囲気、このチェロ協奏曲の基本的な方向性を定めている。「いかにして、この詩に登場する老人は窓辺に立ち、そこから、粉雪の降る静寂のなかで雪に覆われた自分の人生を見つめ、生涯を思い返しているのか、その心の状態を思い浮かべることが、わたしがこの音楽を着想するきっかけとなった」とマティアス・ピンチャーはいう。これは「目覚めの状態、そして、自己認識に到達した状態」である、と。ここでもまたピンチャーは、室内アンサンブルのための『初めに [ベレシート]』のような初期の作品から現れていた創作上のテーマを継続して追求している。それは目覚めであり、次第に目が開かれていく状態の始まりであり、また、この状態のもろさである。「経験と時間を積み重ねることで、人間は、この状態において認識を深め、イメージとメッセージになって現れ出てくる様々な記憶を感

知する。ぼやけた輪郭から明瞭な輪郭へと進むこと、これもまた[創作上の]ひとつのテーマである。」この曲は単一楽章であるけれども、2つの大きな対照的ブロックによって句切を入れられる。「しかし、結局は、チェロがあたかも人間の声のように扱われて暗い歌が歌われるもとの状態に戻ってくる。」低音弦楽器のためのこの新しい演奏会用作品は、『ひそやかに [アン・スルディヌ]』にも、またその後作曲されたスコルダトゥーラ [つまり、変則的な調弦をされた] ヴィオラとアンサンブルのための『テネブレ』にも、さらにはヴァイオリンのための『まぼろし Mar'eh』にも染み渡っていた、様々な美学的アプローチを突き詰めて、結び合わせるものである。これらの美学的アプローチは、いずれもが線的な性格、すなわち、自由に歌うという喜びを求め、また静かな影の世界を探求するのである。

※[ ]は訳者による補足

[マリー・ルイズ・マインツ/藤田 茂 訳]

Solo Vc – 3 Fl (2 Picc / Bs-Fl) / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / CB-Cl / 2 Fg / C-Fg – 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub – 4 Perc (I=Vib / Crotales / Tam-Tam / Tamb / Timp / Metal Chimes / Suspended Cym / Sandpaper Blocks / 5 Bongos II=Glock / Tam-Tam / Bell Plates / 3 Suspended Cym / Bass Drum / Thunder Sheet / Guiro III=Mar / Bass Drum / Bell Plates / 2 Suspended Cym / Log Drum / Vibraslap / 5 Bongos IV=Tubular Bells / Tam-Tam / Sandpaper Blocks / Gong / 5 Bongos / Guiro) – Hrp – Pf – Strings (14-12-10-8-6)

初演 2017年3月23日 ポストン・シンフォニーホール  
 フランソワ=グザヴィエ・ロト(指揮)、アリサ・ワイラースタイン(チェロ)  
 ポストン交響楽団  
 委嘱 ポストン交響楽団、デンマーク放送交響楽団

●マティアス・ピンチャー (1971~)

## 『河 [ネハロート]』

オーケストラのための (2020)

— ネハロートは(ヘブライ語で)河を意味するが、また、涙も意味している。

— それはまた悲嘆の涙のことでもある。

— この音楽は、2020年の春、新型コロナウイルス感染症の死者数が日々、最悪を記録している時期に書かれたものであり……明ら

かに [社会的な] 荒廃と不安を映し出しているが、また、わたしたちの人生のこの時期の心にしっかりと刻まれた光への希望も映し出している。

— この音楽の音の流れは [河の] 流れを思い起こさせるが、それはまたシャルトル大聖堂の謎からインスピレーションを受けたものでもある……シャルトル大聖堂が建てられた場所の真下を複数の川が横切っているという謎 (そして、このシャルトルの大聖堂が焼失後に再建されたものであること、つまり、運命によって破壊し尽くされても、再度、立ち上がったこと……このこともまた、この音楽の情動的内容のシンボルとなった)。

— わたしがこの音楽で描き出したかったのは、長い音のアーチであり……そのために、『河 [ネハロート]』の深い音世界の音響スペクトルの源として、2台のハープを大々的に活用した。

— この作品は「[追悼曲としての] トンポー」であり、「[死者を送る] レクイエム」であり、「[追悼の祈りとしての] カッディーシュ」であり……この異様な時期にわたしたちが亡くしたすべての人々に捧げられている。

※[ ]は訳者による補足

[マティアス・ピンチャー／藤田 茂 訳]

3 Fl (Picc) / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub - 5 Perc (I=Bell Plates / Vib / 2 Suspended Cym / Tam-Tam / Metal Chimes / Guiro / Shell Chimes II=Bell Plates / Tubular Chimes / 3 Suspended Cym / 2 Tam-Tam / 3 Bongos / Claves / Side Drum III=Tubular Chimes / Suspended Cym / Tam-Tam / Thunder Sheet / 2 Guiros / Log Drum / 2 Sandpaper Blocks / 2 Tri IV=Crotales / Glock / 3 Suspended Cym / Tam-Tam / Spring Coil / Bass Drum / 3 Wood Blocks / 2 Maracas / Thunder Sheet V=Mar / Tubular Chimes / Glock / Suspended Cym / Tam-Tam / Guiro / Frame Drum) - 2 Hrp - Pf (Cel) - Strings (16-14-12-10-8)

●モーリス・ラヴェル (1875~1937)

『スペイン狂詩曲』 (1907~08)

1907年に32歳を迎えたラヴェルは、当時のパリの音楽界において、いくつかのピアノ曲と歌曲で知られる新進作曲家だった。この年に彼

はスペインに因んだ3つの作品、オペラ『スペインの時』(1907~09)、声とピアノのための『ハバナラの形式によるヴォカリーズ=エチュード』(07)と『スペイン狂詩曲』を作曲する。ラヴェルとその母親は仏西国境のバスク地方の出身だったことなどから、スペインは彼にとって縁の深い国だった。『スペイン狂詩曲』はまたラヴェルが初めて取り組んだ大規模な管弦楽曲であり、その巧みで緻密なオーケストレーションが評価されたことは、ラヴェルのキャリアの進展に大きく貢献した。

1907年の夏から10月にかけて2台ピアノ版が作られ、翌年2月にオーケストレーションが行われた。スペイン系のフランス人歌手、マリア・マリブラン(1808~36)を母にもつラヴェルのパリ音楽院時代のピアノの師、シャルル・ド・ベリオ(1833~1914)に献呈されている。4音の下行するモチーフで始まる**第1曲「夜への前奏曲」**は、「暑い一日の終わりの倦怠」(ジャンケレヴィッチ)を喚起する。途切れなく始まる**第2曲「マラゲーニャ」**は、3拍子によるフラメンコの一つで、高揚したのちコーラングレによる自由なモノローグに、上記の4音のモチーフが絡み合う。ゆったりと奏されるノスタルジックな**第3曲「ハバナラ」**は、約10年前に作曲された2台ピアノのための『耳で聴く風景』(1895~97)第2曲の管弦楽版(その数年後にドビュッシーが作曲した「グラナダの夕べ」には、この「ハバナラ」原曲との類似が指摘された)。**第4曲「祭り」**の原題「フェリア」は、スペインと南仏で開かれる闘牛や縁日を主とする祭り。5つのモチーフを主部に据えた3部形式で、冒頭の4音の下行が回想されたあと、音型の旋回の果てに勢いよく終結する。

[平野貴俊]

2 Fl / 2 Picc / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 3 Fg - Sarrusophone / 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - Timp / Bass Drum / Cym / Tri / Tambour de Basque / Cast / Tambour / Tam-Tam / Xyl - Cel - 2 Hrp - Strings

初演 1908年3月15日 シャトレ座(パリ)  
エドゥアール・コロヌヌ(指揮)、コロヌヌ管弦楽団